

# ミュンヘン日本人国際学校における多様性を認める国際感覚の育成

～社会科の校外学習（MT〈ミュンヘンタイム〉学習）を通して～

前ミュンヘン日本人国際学校 教諭

茨城県龍ケ崎市立城西中学校 教諭 鹿内 勝己

キーワード：在外教育施設、ミュンヘン、社会科教育、国際理解、校外学習

## 1. はじめに

授業については、ドイツにある日本人学校としての特性を生かすため、小学部1年から中学部3年まで現地理解の手立てとしてドイツ語を週3～5時間学習している。また、本校独自の学習内容としてMT（ミュンヘンタイム）という現地理解学習を行っている。以下、私が担当した社会科との関連で行ったMT学習の実践の概略を紹介したい。

## 2. 実践内容

### (1) ミュンヘン日本人国際学校の研究テーマとMT（ミュンヘンタイム）学習について

ミュンヘン日本人国際学校では【「多様性を認める心を育む教材の創造」～本校の目指す国際感覚の考察～】をテーマに掲げた研究が平成25年度にスタートし、「自己理解」、「自国理解」、「他者理解」、「他国理解」の4つの観点と、それらをつなぐ「表現力」が国際感覚育成のためのキーワードとなっている。これら4つの観点を踏まえ児童生徒の国際感覚の育成をすすめる上で、体験的な学習や課題学習を充実させたMT〈ミュンヘンタイム〉学習（現地理解学習）が本校独自の学習として教育課程上、重要な位置づけがされている。MT学習は、日本国内で行ういわゆる生活科や総合的な学習であり、主にミュンヘン市内において生活科や社会科などに関連した施設を訪れ、現地理解学習を推進する学習活動である。日本と異なる点は、全てが現地理解、国際理解を意識した学習内容・活動であり、基本的にドイツ語を活用した学習であるということである。

このMT学習では、事前学習→実際の校外学習→事後学習を通して、ドイツやミュンヘンの生活習慣や文化に触れ、他者や他国を認め合う感覚を育成することをねらいとしている。また、自己あるいは自国を知り認める感覚を育成することもねらいとしている。そして、学んだことや身に付けてきた力を表現する場として、文化祭（ドイツ語学習発表会）が2学期の大きな行事として毎年行われている。

### (2) 授業実践

#### ① 2014年度 小学部第5学年 「自動車をつくる工業」

##### ア 研究テーマと実践内容との関連性

5年生は社会科の校外学習でドイツの車についてMT現地理解学習を計画した。事前学習・実際の活動・事後学習で知識を深め、深めたことを文化祭で発表することにした。文化祭の発表は全てドイツ語で行うため、言語学習を通しての異文化を理解する機会、文化祭に向けての調べ学習を通して歴史・文化面で多様性に気づく機会が多く設けることができる。さらに、これらの活動を通して、クラスの中でも様々な考え・特性があり、言語や国に関係なく「一人ひとりが違う」ことを認め、尊重する気持ちを育む取り組みが可能であると考えた。

小学部高学年団の研究のサブテーマは「ドイツ語学習発表会（文化祭）に向けての取り組みを通して育てる国際感覚」である。MT学習や文化祭にむけての取り組みを通して、多様性を認める心を育み、国際感覚を培っていけるのではないかと考えた。

## イ 成果と課題

学期始めに「BMW Welt」に見学に行き、BMW社の自動車工業についての学習を社会科の副読本を中心に行ってきたことで、BMW社や車への児童の興味・関心が高まり、文化祭のために自分たちで車を作成し、劇で演じたいと考えるようになった。文化祭に向けての製作では、車の特徴を生かしたオリジナルの車を作成しようと、友達と協力して、意欲的に活動することができた。また、文化祭当日は身振りや手振りを用い、堂々と演技することができ、「よくできた。がんばった」など達成感を味わうことができた児童が多かった。こうした活動を通して、自信を持って表現するという、表現力の育成に努めることができたと思える。

「これからの自動車づくり」についての調べ学習では、教師側で意図的に調べやすい子ども向けサイトを紹介し、班活動を取り入れたことで、必要な情報を取捨選択しながら主体的な調べ学習を行うことができた。調べたことをポスターにまとめ、発表し、話し合うという一連の活動を通して、「これからの自動車づくりでは環境に配慮した自動車づくりが大切である」ことに改めて気づくことができた。日本の4つの会社同士、またはドイツのBMW社との比較通しながら他の良さを認める活動を行ってきたことで、多様性を認める心の育成、国際感覚の育成につながってきたと思う。

文化祭の発表内容も研究授業で行った「これからの自動車づくり」についての学習もいずれも社会科の自動車をつくる工業に関連した内容ではあったのだが、研究授業のための学習内容を文化祭に盛り込むことができたなら、さらに高学団のテーマに近づけたのではないかと思った。そのためには、社会科の授業、MTの活動、文化祭、研究授業に関連した習などすべてを念頭にいれ、一年間の系統立てた学習計画を立てていくことが大切だと改めて感じた。

## ② 2015年度 中学部第2学年 「2度の世界大戦と日本～ヒトラーの台頭」

### ア 研究テーマと実践内容との関連性

職員研修でのミュンヘンの史跡巡りや地域素材の活用・発掘のために訪れたNSドキュメントセンター・ミュンヘンでの見学を通して、これらの訪問先が中学部2学年の教育目標を達成する上で効果的な場所だと捉え、社会科のMT学習に生かすことにした。そこで、中学部2学年の歴史学習を深めるために、または、発展的な学習のために「2度の世界大戦と日本～ヒトラーの台頭」という単元を設定し、現地理解学習を行うことにした。

## イ 成果と課題

ミュンヘンの市街地の通りや観光名所など、普段自分達が無気なく訪れている場所が、ナチス関係の史跡だと分かり、驚くと同時に第一次世界大戦から第二次世界大戦の歴史学習を学ぶ意欲が確実に高まったようだ。事前・事後のアンケートからは、「教科書だけでは知ることができないところを自分の目でみることができ、ためになった」「ナチス時代のドイツについて知り、その出来事的重要性がわかりた



「これからの自動車づくり」についての話し合い



MT学習（ミュンヘン・ドキュメントセンターでの見学）

めになった」などの感想が聞かれ、確実に理解を深めることができたことが分かる。

しかし、この単元を扱うに当たり、ドイツの歴史の負の側面にばかりとらわれ過ぎて、ドイツに対して強いマイナスイメージを与えすぎないように気をつけなければならない。ドイツが過去の過ちを真摯に受け止め、それと向き合い過去の歴史を学ぶ強い姿勢と、自分たちが自国の歴史を学ぶ姿勢とを比較することで、今後の歴史学習に対する取り組みや考え方に参考にして欲しい。日本人として自分たちの祖先が行ってきた戦争をどう捉えていくのか、これからの課題として生徒が主体的に考えらえるよう支援していかなければならないと思う。

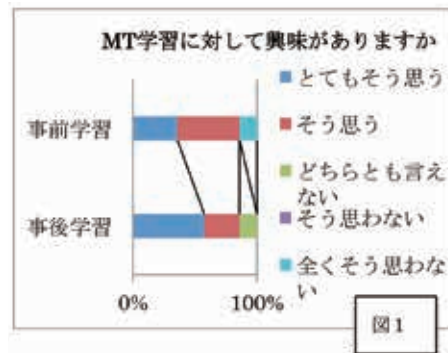
### ③ 2016年度 中学部第3学年 「平和の砦を築くために～ダッハウ強制収容所訪問を通して」

#### ア 研究テーマと実践内容との関連性

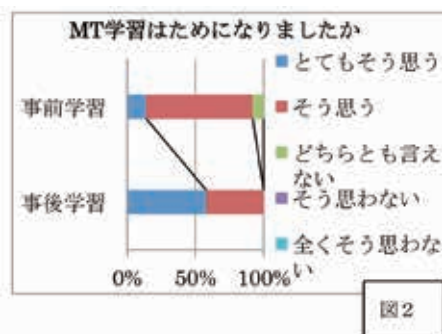
中学部2年生の3学期にNSドキュメントセンター・ミュンヘン、中学部3年生の1学期にダッハウ強制収容所、そして、2学期初めに歴史学習の一環としてバルリン方面へ修学旅行に出かけるという一連の学習の流れが、ここ1・2年でできあがった。中学部3年は「人権学習」や「平和学習」がMT学習のテーマとなっている。今回は、年度始めに本校校長からユネスコ憲章前文の「戦争は人の心の中に生まれるものだから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」が紹介され、それを受けて「平和の砦を築こう」というテーマのもと、中学部3年生のMT学習がスタートした。

#### イ 生徒の意識の変化と考察

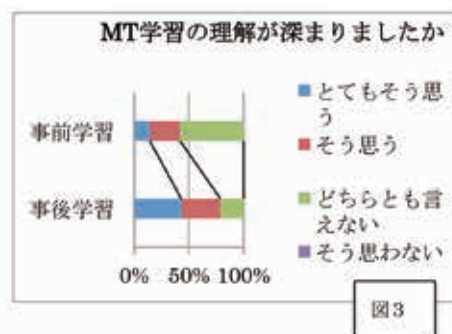
学習前後でアンケートを実施し、生徒の意識の変容を見ることにした。興味の度合いに関しては<図1>から、肯定的な考えを持つ生徒が多いことは前後でそう変わらないが、確実に「とてもそう思う」の割合が増え、「全くそう思わない」という生徒はいなくなった。



「MT学習はためになりましたか」の質問に対しては<図2>から、やはり肯定的な考えの生徒は前後で多く見られたのだが、その中でも特に「そう思う」と答える生徒の割合が倍以上に増えている。



「MT学習の理解が深まりましたか」に関しては、<図3から>肯定的な考えを持つ生徒の数が確実に増え、「どちらともいえない」の割合が低くなっている。その内容については、「ダッハウ強制収容所のシステムの変化について分かった」、「ひどい行為や状況が分かった」などと答えている。



また、「新たに興味がわいたことがある」と答えた生徒は半数以上あり、「収容された人々はどのように耐えていたのか」、「なぜ人体実験を行っていたのか」などについて、知りたいと答える生徒が見られた。

以上のことから、MT学習を通して、ドイツの歴史やダッハウ強制収容所について意欲的に学習に取り組み、歴史学習や現地学習の理解を深めることができたということが明らかになった。

### 3. 成果と課題

#### (1) 成果

これまでの実践を通して強く感じたことは、いかに自分自身が現地理解に努めていくことが重要かということだ。児童生徒の教育目標を達成し、児童生徒の国際感覚を育てたいと思うのであれば、自分自身がドイツやミュヘンの文化や習慣を学ばなければならない。自分自身がドイツやミュンヘンの歴史や施設のことを詳しく知らなければならない。もっと詳しく知って、学習に生かしたい、児童生徒と共に現地理解に努めていきたいという欲求のもと、ミュンヘンの施設等を訪問し積極的に情報収集してきた。その結果、地域素材の発掘・活用を行い、より良い教材・教具の工夫に努めることができた。そうして、教材・教具を事前・実際の活動・事後学習を通して、効果的に使い、児童生徒の興味・関心を高めることができた。そして、社会科の目標を達成するだけでなく、日本とドイツを比較したり、自分や自国を見つめ直したりして、それぞれが「これからのより良い自動車開発」や「平和の砦を築くための方法」としての自分の考えを持つことができ、国際感覚の育成につながっていったと捉えている。

#### (2) 課題

現地理解学習を通して身に付けた国際感覚を実際の生活に生かしていけるか、生かし続けることができるかが今後の大きな課題になるだろう。環境に配慮した自動車開発を目指すと同時に、環境に配慮した生活が普段の中でどれだけ意識的に行われているだろうか。また、心の中に平和の砦を築こうとしているが、クラスの友達との関わり合いはどうだろうか。このように普段の生活に目を向けてみると、まだまだ、実践できず机上の学習で終わってしまっていることが多いように感じる。学んだことをぜひ、実生活に役立て、生かして欲しい。そのためにも、学習したことを自分の生活レベルで振り返られるような学習展開の工夫が求められるのではないかと考えている。